

亡くしたため家を離れていたが帰郷した。

ガダルカナル・サイパン・比島のレイテと大戦も益々激しくなり、沖繩にも米軍が上陸し、三月十八日には我が浦代も初めて艦載機による射撃をうけ、個人でも被害をうけた家もあり、将来どんな事になるのかと不安の日々であった。又この頃から陸軍の兵隊が村に駐屯していたが、軍事訓練をするでなく、百姓の加勢をするため各家庭を廻り、仕事を探して歩くような始末で、変な思いをしていた。

三月も下旬になるとB29が毎日の様に来襲し、制空権は米軍の手に移ってこちらは逃げるのに大変で、防空壕を掘ったりして避難するのに苦労した。農作業等も手につかない毎日であったが、麦刈り芋植えは何とかして終えた様である。

八月に入ると一段と戦争は激化し、十四日には明十五日正午に天皇陛下の重大放送があると聞いたが、その放送は雑音が多くて聞きとり難く、無条件降伏とは全く予想しない、神国日本といわれていたのに情けない、諸先輩にすまない気持ちで何事も手につかず、やる気をなくしたものであった。

九月に入ると早速海外から復員軍人・引揚者等が続々と帰国、日本開闢かひつゝ以来の食料難となり、食べられるものは何でも食べようと、現在では考えてもみない食生活であった。十二月近くになると他所どこから聞いて来たのか当地でも塩を作り、それを竹田・朝地の米作地まで運び、物々交換に一生懸命で飢えを凌ぐのに苦労した。こんな物々交換時代は二十三・四年頃まで続いた様に思う。

## 『終戦記念日に思う』

御手洗 進

昭和二十年八月十五日正午、私が天皇の終戦に関する詔勅(玉音放送)を聞いたのは浦代国民学校高等科二年生、満年齢は十三歳の時であった。太平洋戦争が終わって四十七年、あの日も今年の夏のように強い陽射しの照り付ける暑い日であった。当時十三歳の子供も今は六十歳の還暦を過ぎ、痴呆症の兆しかそれにしても未だ少々早い、時には物忘れもする今日この頃である。しかし、

終戦の日の出来事は今も鮮やかに記憶の底に残っている。

戦争末期の頃の校舎は本土決戦に備えてか、村内各所に陣地構築を急ぐ軍隊の駐屯宿舎に当てられ、私達児童生徒は、神社やお寺に分散して細々と授業をしていた。とは言っても、天気の良い日は殆どが奉仕作業で、米と芋を植えた学校農園の作業や炭焼き、芋は生徒の手で運動場を半分掘り起こし植えていた。祝祭日なし勿論夏休み無し、文字通りの「月々火水木金々」である。私達上級生は村の中樞機関、村役場の非常事態を想定してか、旧村役場の講堂の一部を教室にし、そこから作業等に通っていた。当日正午に重大放送のある事は既に前日知らされていたが、これが日本降伏の放送とは夢にも考えていなかった。ラジオは何故か雑音が酷く、しかも子供には言葉も意味も良く理解出来るものではなかった。ただ、戦争が終わった事だけは周囲の様子から臆気ながら分ったが、まだその時点では実感として、本当に戦争に負けたとは思わなかった。

真珠湾の奇襲以来、南方方面に展開した破竹の勢いの日本軍に国民は沸いたが、物量に優る連合軍の反撃が始

まると次々に敗退し、米軍機の本土爆撃は日増しに激しさを加え、東京等の主要都市のみならず地方都市にまで拡大され、佐伯基地への初空襲が三月十八日、この日は小浦地区に出征兵士の見送りがあり、私も親戚の人を送るため地区の人達と船に乗り浦代に向かっていた。丁度船が平間沖に差しかかる頃、松切鼻上空を北上して来る艦載機の編隊を発見、最初は日本機と勘違いした人が「友軍機だ」と叫ぶと、「わっ」と喚声が上がって万歳の声まで飛び出した。しかし、次第に飛行機の輪郭がはっきりし米軍機だと分かる頃には、地上陣地から打ち上げる対空砲火の爆発音と煙が空を覆い、満船状態の見送り船内は悲鳴と怒号でパニック状態、やっとな平間の鼻に着けて這い上がり家に逃げ帰った。初めての体験ではあったが、この時程怖い思いをした事はなかった。幸い怪我人もなかったが、米軍機が爆撃に向かう途中だったのが幸いした。帰艦途中だったら多分機銃掃射を食らって犠牲者も出たであろう。事実この日の佐伯空襲帰りが浦代に機銃を浴びせている。この空襲があつてから、地区内各所に本格的な防空壕が急ピッチで掘られる様になった。やがて連日の様に飛来する米軍機にも次第に馴れつこ

になつていった。六月二十三日、沖縄戦が多くの県民を犠牲にして終結、広島・長崎と続いて新型爆弾が投下され、両都市共に人命を含む多大の被害が出たと聞いても、ひたすら神国日本の勝利を信じて疑わなかった。少くとも私達は日頃からその様に教え込まれていた。即ち、神国日本は不滅である。神武以来二千六百有余年の栄えある歴史がある。この戦争も最後は必ず勝利する。鬼畜米英、若し万一この戦いに敗れる様な事があれば日本国は消滅、敵国が統治、天皇陛下の身はもとより指導者は全員処刑、その他日本国民は男女を問わず奴隷となる。だから、苦しくとも勝利の日まではと極限の生活を強いられても不満を漏らさず、国民等しくこの窮乏に耐えて来た。私達幼い児童生徒でさえ、国のためなら命を投げ出す覚悟もそれなりに出来ていた。当時航空燃料にと松脂採取が奨励され、村内至る所の松は全部松脂取りのため傷付けられていた。私達もこの作業が日課の一つで、この日も放送が終わると半信半疑で何時も通り浦代の秋葉山に登った。山から帰るとボツダム宣言受諾、日本は無条件降伏で完全に負けたと言う。私はそれでも嘘だと思つた。だが周囲の様子は今までと一変し、張り詰

めた緊張の糸が切れて、軍人も役場職員も教師も村民も一様に放心状態であつた。やがて担任教師の説明を受け家に帰つたが、私の地区でも様子は同じであつた。誰彼となく「これからの日本の国は、我々日本国民はどうなるのか」と、不安の声があちこちで聞かれた。

これまで、米軍機から撒かれたビラは拾うことも読むことも禁じられていたが、この日も山で拾つて読んでいた。只、あれ程毎日決まつて飛んでくる飛行機がこの日に限つて静かで不思議に思えた。だが私達は昭和十三年に小学校入学以来、義務教育の八年間を戦争の中で過ごした。見るもの聞くもの全て戦争と無関係で無く、言わば終始して戦争教育の中で育つた。だから指導者の言葉を疑う事なくビラの内容など信じていなかった。今でも思う事があるが、幼少時代の教育が指導者次第で如何様にもなる。教育の力の偉大さを感じる。戦争が終わり、連合国軍駐留後の戦後処理政策に不安を持ち、本気で山奥に逃げる用意をした人もいると後で笑い話にもなつたが、私達が教えられ不安を抱いた事は全くの杞憂に過ぎず、むしろ敗戦国としては恵まれた扱ひであつたと思う。拾う事も読む事も厳しく禁じられた米軍機から撒か

れたピラの文句に、嘘はなかったと思った。

戦後新憲法が施行され、これによって教育制度指導方針も変わり、子供も教師と対等に自由に話が出る時代になった。かつて私達が受けた様な厳しい指導はなくなり、児童生徒も伸び伸びと勉強に専念出来る事は幸せである。日本は戦後の廢墟の中から立ち上がり、国民生来の勤勉さが世界に誇る経済大国を作り、私達は平和で豊かな日本に生まれ合せた幸せを感じる今日であるが、先般賛否両論で内外に物議を醸し成立したPKO法案でも、両論いづれも平和を希求するものであり、四十七年目の終戦記念日を迎え改めて当時を憶い、先の大戦で三百余万以上の尊い人命を犠牲にして得た平和で美しい日本の国土、この素晴らしい国土を再び戦火に晒してはならない。世界各地で今もつて絶えない地域紛争のニュースが放映される度に、悲惨な状況が痛々しい。PKO法案成立で自衛隊の海外派遣も可能になるというが、先の大戦の反省の上に不戦平和を理念とした日本国憲法が生まれた。間違っても二度と再びあの様な愚かな戦争に巻き込まれる事のない様、全世界の恒久平和を心から願う者の一人です。

## 『私の昭和二十年八月十五日』

渡 辺 豊 光

私は当時、浦代国民学校高等科二年生であった。校長は前年四月から木立出身の武田先生、担任は佐伯出身の笠村先生であった。

戦争はたけなわで、銃後の小国民にとつては必勝の信念しかなかった。グラントは主食の芋・麦を植える畑に変わっていた。木立出身の農民学校長の指導で木炭を焼いたり、稲作をし堆肥を作る。農家の手伝いや奉仕作業をする。いろいろなことを教えられ働かされた。古い教育を受けていた私たちは叱咤激励と受けとめて、反つてこの校長は人情家だと威厳に恐れてもいたが、反面なつているところも多かった。

校長の指導で炭焼き竈をグラントの隅に造り、浦代峠から元越山の大火で焼け残った立ち枯れの桜を生徒が鋸でひき、大八車に大勢取り付いて学校まで運び木炭を焼いた。

また、百姓仕事の奉仕に出たり、堆肥を作るため草や柴を刈りに、田鶴音から桶の浦の東までの間山野と畑を